

「肥後藩主 細川重賢公による腊葉

帖」供覧

『重賢公植物採集帖』宝曆二年（一七五二）

一帖

『三千乃枝折』（宇土細川家旧蔵）四冊

匂坂 浩

昭和三十五年十月二十三日よりの第十五回熊本国体の開  
会式の先日、二十二日に両陛下は旧五高の赤門をくぐり、  
熊本大学図書館二階で各種の資料を御覧になられた。

熊本大学「御視察資料」によると「古文書等目録および  
解説」の五項目に「細川家北岡文庫文書」がある。

その「第一〇」 写生帳―「毛介綺煥」「百卉俸状」「聚  
芳図」「昆虫胥化図」「薺百合雜」「艸木生写」「花木形状」

「虫類生写」「艸木生うつし」「押葉帖」を収めた帙がある。

「第十一」 宝曆年間重賢の写生帖を、天明九年、藩の再  
春館医生鶴田健春が模写したものである「生写総目録」二

冊、「昆虫胥化図」二冊、「草木形状」三冊である。

「第十二」腊葉帖

藩主細川重賢が、その居屋敷および参勤交代途次に採集  
した草花類を腊葉にしたものである。我が国に現存する腊  
葉帖として最古のものであるばかりでなく、前出の写生帖  
と併せて重賢の生物に対する興味を示し、珍重すべきもの  
である。「三千乃枝折」四冊、「重賢公植物採集帖」一冊は  
宇土細川家の旧蔵。

「重賢公植物採集帖」一冊、宇土細川家旧蔵

表紙共一六枚、一枚目は白紙、二枚目の右下隅に「月  
翁」の三・五稜角の朱印あり。その後の頁に五三種の植物  
を丁寧に細い金紙で綴ってある。最後の見返しに、「銀台  
公御採取植物 宝曆二年五月 納戸方」として間に三・五  
稜角の「桂源山人」の朱印がある。植物の上には横一縦縦  
四纏の金紙が全部に張られて、植物の名が書かれた跡があ  
る。

「三千乃枝折」四冊

各冊一七枚で四冊で六八枚。全五冊のうち巻三は初めより欠落していた。公が参勤交代の折々の植物を江戸より順に採集地を書き、五冊に綴じ整理されたものである。

巻一は「駿河富士郡公領吉原」より出発し、第五巻は「豊後大分郡鶴崎」より始り「熊本」で終る。この帖には、奥書、朱印等はない。地名の字は公の書であるか不明。植物は朱色の糸で綴てある。

以上を供覧する。

細川重賢は、享保五年（一七二〇）十二月二十六日、六代藩主宣紀の五男として生まれ、七代の宗孝の養子となり、延享四年（一七四七）江戸城にて宗孝が旗本板倉勝該のために不慮の死を遂げたため、急に二十八歳で封を継ぎ、將軍家重の一字を賜り重賢と改名した。当時藩は窮乏の極にあり、質素儉約を旨とし、堀平太左衛門を大奉行に抜擢し藩政を刷新し、かつ、文教政策を重視し、宝暦四年時習館を設立した。次いで宝暦六年（一七五六）に医学寮再春館を創設し、同時に薬草園蕃滋園を作った。本草、博物学の心得もあつたと想像される。明和二年（一七六五）に創設さ

れた江戸神田佐久間町の多紀安元の躋寿館より九年早い。なお、安永三年（一七七四）の島津重豪の医学院の創設はさらに一八年後である。天明二年（一七八二）に畑黄山の京都の医学院、享和元年（一八〇一）の会津藩の医学寮もすべてその後である。すなわち、再春館こそわが国最初の組織的医育機関である。

細川興文（一七二三～八五）

肥後宇土藩主、三万石、「月翁」と号し、藩政の改革に努め、藩校温知館を起し、農民に「はぜ」「こうぞ」の栽培を奨め、製紙製蠟業を発達させる等宇土藩中興の名君といわれる。

以上、腊葉帖とその周辺につき説明した。

実は昭和五十九年に至り、大新聞の紙上に各地において藩主またはその家族の作った標本が「日本最古の押花標本」として、国立科学博物館の伊勢の植物研究家飯沼慾斎（一七八一～一八六五）の標本等と対比して報道され、元熊本大学教授森田誠一氏は「お国自慢による新聞記事」に對する注意を喚起しておられる。

昭和六十二年九月東京サントリ美術館での「日本博物

学事始―描かれた自然―として広汎な展観があり、細川公関係の写生図、動物標本等の既述のものが多数出品されたが、この腊葉は見られなかった。この機会に手にとって見ていただきたいと思ひ供覧する次第である。

昭和三十五年十月二十三日、ある新聞の記者は両陛下下の御視察について次のように書いた。

「肥後古文書のなかには十八世紀の半ばごろ細川藩が作った腊葉帖（植物標本帳）などが展示してあった。天皇陛下は楽しそうに手にとられて標本帳を繰られ、皇后陛下もかたわらからのぞきこまれるなどおむつまじい視察風景だった。最後に『細川家にこれだけたくさんの文書が残ったのは戦争がなかったのか』とお尋ねになり、戦火のきびしさを思ひ出されたようだった」

腊葉帖のごときを供覧することには問題も多いが、熊本での想い出として御記憶していただけたらこれに過ぐる喜びはない。

（熊本県熊本市）

## 『蘭方口伝（シーボルト失勃兒杜驗方録）』について

中村 昭

P・F・シーボルトがわが国の蘭学の進歩に大きな貢献をしたことは誰もが認めていることであるが、彼が日本人の門人達に実際にどういうことを教えていたかは、意外に知られていない。

もともとシーボルトは、後のポンペのように教育の目的で日本に来たのではないから、あまり系統的な教育をしなかったのも当然かもしれない。彼が日本の門人達に日本に関する論文をオランダ語で書かせて、それによって研究方法を指導し、またそれを自分の研究資料にもしたことはよく知られている。

この他に、シーボルトは長崎郊外の鳴滝で週一回ほどポリクリニック（外来診療）を行い、そこで門人達に臨床教育を施した。これも元来教育を目的として始めたものではな